
Knight in night **～それでも世界を愛すのか？～**

AvEI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Knight in night ｝それでも世界を愛すのか？

【Nコード】

N7130Y

【作者名】

AVEL

【あらすじ】

イルミネ学園普通科二年、【暁さくや】は住み慣れない土地で二回目の春を迎えようとしていた。

個人が持つ魔導ランク重視の『魔導科学社会』において、（最低）ランクGを持つさくやを待っていたのは、激しい拒絶と暴力だった。それでも、誰に弱音を吐くこともなく耐えてこれたのは、『最愛の姉』があつてこそだった。

これは一人のシスターコンプレックスな青年が、矛盾に満ちた世界を駆け抜ける——そんな物語。

《更新状況》

《第一話（完成）投稿しました》

携帯で見える方は、本文改行二倍推奨です。

本文はリズムを崩さないよう書きませんが、感想、指摘、改善点がありましたら宜しく願います。

なお、題名についている「」は改正を示します。

プロローグ

00

もし【あかつき暁さくや】について語ることがあるとすれば、彼は極度のシスターコンプレックスであると言っただけだ。彼の原動力は『姉』の存在であり、学園の成績もその目立たないようにしていた性格も、全ては姉に迷惑をかけぬようと心掛けていたものだった。『魔導ランクA』で国立魔導研究所に勤務する優秀な姉に対して、『ランクG』という事実上魔力が無い彼に出来ることと言えばそれくらいしかなかったからだ。

神様はとても残酷で、平等過ぎると彼は思っていた。血の繋がっているはずの姉弟にも関わらず、先天的な能力が天と地程差があったからだ。

『人間は産まれた時から平等じゃない』

それを知っていた彼は、せめて姉の汚点とならないように努力を重ねた。

『魔導科学社会』に置いて、魔導ランクはほとんどそのまま社会的地位になる。この国を含め、平等と謳っている全ての国の上層部は全員優秀な魔導ランクを持っている貴族たちばかりだ。

神様は平等だ。公平にサイコロを振っているに違いない。

だから何が言いたいかっていうと、こんな卑屈に卑屈を重ねた思考を持つ青年【暁さくや】を語るのは、本人たる俺からしてみても、

なんと言つか意味なんて無いんだと思う。

ただひとつだけ言いたいことがあるとすれば、俺自身は誰もが世界史で学ぶ『次元大戦』を終結に導いた『勇者』であつたり、それと対をなした『魔王』や『魔神』じゃないってことくらいかな……。

だからこれから語るのは、誰にでもあるような話。

もしかしたらこれを語っているのは、今読んでるあんただつたかもしれない——サイコロを振っている神様から見れば、あんただつて俺だつてそう大差は無いはずなのだから……。

——l o g - o u t……

第一話

01

世界は矛盾で満ち溢れている。

——嘘じゃない

そんな不満を抱えながら俺——【あかつき暁さくや】は絶えることのない
暴力に身を任せていた。

薄汚れた狭い路地のコンクリート壁は、鈍い音でもよく反響させる。

背中から両腕をホールドされ無理やり立たされている俺の体力は、
とつくに限界を越えていた。今は呼吸をするだけでも辛い。

「死ねや!!」

——とかなんとか言っで、どうせ殺す勇氣なんて無いんだろ……

口先だけの威勢のよさに俺が頬を釣り上げると、口元から生暖かい液体が頬を伝った。さつき顔を殴られた時からだろう——鉄独特の味が口に広がっている。

下校する時まで真っ白だったワイシャツが、いつの間にか黒と赤が禍々しく彩っていた。全身が苦痛で悲鳴をあげていたが、声を上

げるわけにはいかなかい。

こうなることは予想出来たはずなのに、どうして自分は大人しく
“あいつ”を待っていないかったのだろうか？

——まあ、今更悩んでも仕方がない

皮肉れた自分に自嘲し、我慢していた笑みが思わずこぼれた。

「——っ、てめっ!!」

顔を伏せていたにも関わらずそれが見えたのだろうか、相手の暴力の激しさが拍車をかけて増した。さっきより重い拳があらに響いた。

「——あ……」

垂れ下がっていた視線を少しだけ持ち上げたが、分かったのは先輩達の怒りがおさまりそうにないことだけだった。

——今日もまた別の人達みたいだ

今日で何人目になるだろうか。

同学年からの暴力がこの一年で減ったのは事実だ。でも、俺を疎ましいと思っているのが同じ年とは限らないことも事実だった。

何度も殴られた腹部は、自衛機能を発動している。意識もしてないのに筋肉が硬くなっていた。

——そりゃ、一時間も殴られれば、そうなるか……

殴られ続ける中、俺は妙に他人行儀だった。慣れというものは怖

い、さつさと気絶してしまえば楽になるのに……。振りかぶった勢いのいい右フックが急所である溝内を直撃した——というのに、もうあまり痛みは感じない。

いつまで続くんだろう……。と、麻痺してきた感覚にうんざりしてきた。

「おい！何してんだ！！」

狭い路地なので、感覚が麻痺しかけている俺にも、その声はよく耳に届いた。

「やべっ、逃げるぞ！」

突然、名前はおるか、顔すら知らない『普通科』の先輩達の暴力が終わりを迎えた。自分の保身の危機を感じたのか、俺をいたぶっていた先輩達は、地面に置いていた自身の鞆を拾い上げ、逃げるように去っていった。

暴力から解放された代わりに、支えを無くした俺は力なく膝をつき、次いで仰向けに倒れた。

冷たいコンクリートが内出血で火照った身体を冷やしていく。

気持ちがいい。ここで意識を手放せば心地いい夢の世界に旅立てる気がした。きっと血溜まりの中で漂う夢になるだろう。

「警察呼ぶか？」

頭に直接響く音声に、重くなった瞼を仕方なく持ち上げると、革靴が目に飛び込んできた。靴には細かい傷がいくつもついていた。

「いらねえよ……」

お姉ちゃんに心配をかけるようなことはしたくない。

俺は声をかけた男にそう言いつつ、軋きしむ両腕でボロボロになった身体をなんとか持ち上げる。

「——つつ……」

力を入れた場所が激痛を帯び、小さく呻き声を漏らしてしまった。立ち上がるのは諦め、身体を捻り上半身だけ起き上がると声をかけた赤髪の顔がそこにあった。

「だから、待ってるって言っただのに」

俺の惨状を見て、悪友【ケイ・インターラル】は小さく溜め息をついた。

しゃがんでいたケイが立ち上がると、彼の短い前髪が小さく揺れた。

いつもなら待っているのだが、今日は理由わけがあった。それは俺にとって全てに優先される。

——早く帰って部屋を掃除したい

明日はお姉ちゃんが帰ってくる予定なのだ。

「立てるか？ シスコン」

そう言っで自力では立てないでいる俺に、ケイは右手を差し出した。

「地の文読むなよ……」

俺が右手を差し出すとケイは、「何言ってるんだ？ お前」と笑いながら、力任せに引っ張ってくれた。

「——で、なんで待っててくんなかったんだよ？」

俺に肩を貸すケイが、近くに転がっていた俺の鞆を拾い上げた。

「補習になった奴を待ってやるほどできてないんだよ、俺は」

口に溜まった血を路地に吐き捨てた。やっぱり切れてやがる。自分、辛いものは厳禁になりそうだ。

「じゃ、これは俺を置いていった天罰だな、きっと」

「これからは待つてろよな」と、複製音が付きそうなケイの台詞に互いの笑みをこぼした。

狭い路地を抜けると、風に流された桃色の欠片が視界の隅を通り過ぎた。

俺達を迎えてくれた街路樹の桜が、真上から降り注ぐ暖かい光で一層輝いていた。

また、長い一年が始まる。

「おつ、同じクラスで良かったな」

腕を組んで、隣に立つ男が独り言のように呟いた。俺より早く名前を見つけたのだ。

男の着ている学園指定の肩章がついた黒いブレザーからは、だらしなく弛んでいる赤いネクタイが見えた。左胸には誇張するように学園のエンブレムが輝いている。

「何組？」

自分の名前を見つけるのがめんどくさくなった俺は、同じ制服を着ている男に聞き返した。750人もいると自分の名前を見つけるのも楽じゃない。映画館の銀幕みたいな白い電子パネルに生徒の名前が広がっている。一年前同様、嫌気がさしてきていた。

どうせなら、こう全校生徒が中央広場に集まらなくても、前もって自宅に郵送してくれたらいいのに……。

「……待て、見失った」

そう言っただけでクラス表を再び眺め始めた友人ケイ・インターラルは、一年やそこらの付き合いでは、頭が良いのか悪いのか分からない。そんな友人から目を離れた俺は、巨大なクラス表を眺め、果報を待つことにした。

知らない名前が多い。

「お……あつたあつた」

ケイがパズルが解けたときのような軽い声で呟いた。今度こそ忘れないように視線がゆっくりと上っていく。

「で、何組？」

周りの生徒が、こそこそと俺を見るのが少しずつ不快になってきていた。ただでさえ人混みが好きではないのだ。急かすようにそっけなく言った。

俺の方に向き直ったケイの跳ねた赤い髪が愉しそうに揺れている。

——嫌な予感しかない

03

校舎の窓から見る景色は一年前とずいぶん違っていた。それは二年の教室が三階にあるというからではない。

いや、物理的にはそれで正しいのだが、俺——暁さくや自身の変化が一番大きいのだと思う。

視線を伸ばして行くと、巨大な塔にぶつかる。白くそびえるその建物の上部には、学園を象徴する盾に類似したエンブレムが掲げられている。

『生徒会室』だ。いや、もはや部屋とかいうレベルではない。ないのだが、入学のパンフレットや案内板にそう書かれているのだからそうなのだろう。

『魔導科』が支配するこの学園の象徴とも言える“そこ”に、本来なら『普通科』の生徒はあまり縁がない。

——無いはずなだけども……

いや、別に俺が生徒会のメンバーだつり生徒会のお助けキャラというわけではない。そこには“何故か”二度程お世話になって、今では現職の生徒会長に名前を覚えられてしまっている。

さて、そこから視線を右にずらすと見えてくるのは、『魔導科』の校舎だ。ここイルミネ学園には、他の学園同様『普通科』と『魔導科』が存在する。違いは優秀な魔力の持ち主か否かだ。その点では他の学園と変わらない。

『魔導科学社会』のご時世だ。魔導科が無い学園の方が少ないだろう。

学園はそんな魔力持ち有利になった社会に慣れさせる為の場でもある——と、俺自身は思ったりしている。

『普通科』と『魔導科』の校舎は基本的には変わらない。目立つた違いと言えば、『魔導科』のグラウンドにはドーム型の薄い魔法障壁が張られていることくらいだ。

さて、更にそこから右に——

「ちよつと聞いているのかな？ 暁さくやく〜ん」

腫れていない右頬が冷たい何かでつつかれた。振り向くと、なに

げに食い込んでくるので痛い。

——まったくあんなおっぱいだけの女のどこがいいのか……

確かにモモネ・ミカグラ女史は官能的な体を持っている。自身の赤みがかった黒髪を短く切り揃えたセミロングは男子たちには好印象だし、美人な部類なのだろう。

——まあ、俺の好きなタイプじゃないけど……

「——で、何の話でしたっけ？ モモちゃん」

先生に対して敬語を使うのは当たり前。ただし呼称は除く。

「なんでそんな怪我してるか聞いてたんだけど……聞こえなかったかな？」

伸縮自在の光る指示棒を自分の手元に戻したモモちゃんは、額を小刻みに動かしている。もう少しすれば、今辛うじて繕っている笑顔も剥がれるだろうに。

正確には聞こえないようにしていたのだが、そんなことを言えばモモちゃんの怒りのバロメーターが振り切れるのは言うまでもない。モノローグ風に学園の脳内解説をして、質問を逃れようとした俺の作戦は失敗。いや、むしろ悪化しているようにみえる。

それでも笑顔を保っていられるのは、俺達の担任が二年目だからだろうか。モモちゃんが俺の扱いを覚えてしまった気がする——ケイと一緒に。なんとかケイと一緒に、それこそファーストフードセットのポテトみたいに思われるのは意義申したいところだ。けど、俺がハンバーガーなもの、それはそれで何か嫌だ。

「——知りたいですか？」

キリッ、と効果音がついてもいいような目付きに、演技をかけて台詞を吐いた。

突然鋭くなった俺の目付きにモモちゃんは――

「無駄にシリアスな顔しても駄目よ」

あきれた風に溜め息をついた。

いや、結構シリアスだったりするんだけど……、と心の中で呟いておく。

「始業式の帰りに先輩に絡まれて、この有り様です」などと言ったあかつきには、クラス中から、哀れみと不快感に溢れた眼差しを浴びることになる。それに、今からだと有効期限はほぼ一年。それは流石にドMと自負する俺でもきつい戦いになるだろう。

「さくや……早く話してしまえ。これ以上、俺のモモちゃんを困らせるな……」

何故かさつきから席を立っているケイが、右手を腰にあて俺を諭すように言った。雰囲気だけは一人前だ。

「ありがとうケイ君、でも私は貴方のものじゃないわよ」

その容赦無い担任の即答に、立ち上がったばかりのケイが机に伏せて崩れた。その際にガラスが割れたような音がした気がするが、気のせいだろう――ケイの心の厚さは防弾仕様のはずだ。それにケイの立ち直りの早さは人類一だから、心配はいらないだろう。

むしろ問題なのは、モモちゃんの方がイライラを隠せなくなっていること――というか俺のシリアスを返せ、友よ。

クラスの皆もこんな戯れに長くは付き合ってくれないようで、グダグダな空気が流れかけていた。

——潮時だな……

あたかも観念したように、一息ついてモモちゃんの目をロックオン。会話をしている始めて目を合わせられたからだろう——モモちゃんも息を飲んだ。

「近所の大型犬と死闘を繰り広げた……その勲章です」

俺は誇らしげに腫れた左頬を指差した。所謂、ドヤ顔というやつだ。因みに、大型犬がいるというのは本当だが、吠えることすらしない人懐こい犬だ。

俺の返答を聞いたモモちゃんが、いつの間にか片手で頭をおさえていた。モモちゃんが俺に聞いたことを酷く後悔しているようにみえるが——まあ、気のせいだろう。

「はあ……後で犬に謝るときなさいよ」

落胆したモモちゃんは、教員簿を片手に疲れきった様子で教室を後にした。

結局、俺の「はい」という無責任な責任で、新学年最初のホームルームは幕を下ろした。

教室に終鈴が鳴り響くころには、隣で崩れていたケイも立ち直っていた。

いそいそと帰り支度を進めるクラスメイトの中で、俺は一人窓の向こう側を見つめ直していた。

通学用の鞆を肩にかけ校舎を出ると、目に飛び込んできたのは、使用済みになった電子掲示板を片付けている先輩達と、生活指導部の【ゼルト・グレンツェ】だった。

黒いスーツを着たゼルトは、先輩達が最後の電子掲示板を取り外すのを見守っていた。

ゼルト・グレンツェ——その鋭い隻眼はイルミネ学園生活指導部長を寡黙のまま知らしめる。灰色の短髪と隻眼、そしていつも着ているネクタイ無しのブラックスーツからついた渾名は、【灰色の悪魔】。

俺はこいつが苦手だ。他の生徒よりも百倍は苦手だ。こいつだけは、入学当初から俺に眼を光らせていた。

それが妄言で無いことを証明するように、今だって俺が視界に入っただけで近付いて来ている。ゼルトの背中では電子掲示板を外した先輩達が、ありもしない雰囲気を感じて作業の駆け足で作業を進めていた。

ゼルトが俺と距離を詰めてきたので、半歩退いた。

「何かやましいこともあるのか？ 暁さくや」

不意に立ち止まったゼルトは、腕を組んだまま淡々とした口調で問いかけてきた。その表情からは、感情の欠片さえも見受けられない。

「無いです。ゼルト先生こそ何か？」

悪魔のような眼光に慣れたわけじゃない。ただの痩せ我慢だ。それに、多少の怪我は日常茶飯事だ。はつきりと言い切るに限る。ゼルトの薄灰色をした隻眼に、揺れる俺の表情が写し出されていた。

自身が黒い眼帯を付ける結果になった『次元大戦』を導いた一人と言われていることはある——4月上旬だったのに、冷や汗が垂れてきた。

「おい、さくや待てって……げ……」

昇降口から俺を追いかけてきたケイは、俺にたどり着く前に足を止めたようだ。不意にかけられた声に、自分の肩をピクリと跳ね上げてしまった。

「インターラル、何か言いたそうな顔だな」

——助かった……

ゼルトが俺から目を反らし、後方にいるケイに視線の先を向けたからだ。

一方、向けられたケイは「な、なんでも、ないっす！」と普段使わない言葉を繰り出すというテンパリようだ。

離脱の機会は今しかない。俺はさりげなくゼルトに背を向けて、

その場から離れようとした。

「さくや」

無視は出来なかった。

流石、歴戦の元・軍人は厳しい。おそらくケイに視線を定めたま
ま、かけられたゼルトの声に身体が硬直した。

「来年も居なければ、大人しくしているんだな」

「——え……」

振り返ると、ゼルトは解体現場の監督に戻っていた。着ているス
ーツが濃厚な黒に染まっている。

俺は後ろ髪を引かれながらも、中央広場を後にした。
気になる台詞だったが、こちらから関わることはごめんだった。

イルミネ学園には様々施設がある。相対する二つの校舎、巨大な
二つのグラウンド、部室塔、生徒会室、少し離れば学生主導の『学
園都市』が広がっている。

そして、『教会』。

「おい、さっき置いてこうとしたらどう？」

教会へ続く階段、すれ違う生徒もそれほど多くないわりに長い。そう、長いのだ。決して高地に立っているわけではない。自転車なら余裕で上れるゆるい階段なのだ。

「人のこと言えねえだろうが……」

肩にかけた通学用の鞆の位置を直しながら振り返る。ケイは半歩遅れて付いてきていた。中々の不機嫌具合だ――が、言い返してこないのは凶星だからだろう。

「はあ……止めだ止め」

「うん、あほらしい……」

少しだけならみ合った後、ケイと俺は張っていた肩の力を抜いた。俺達はそこまで子供じゃなかった（ケンカ仕掛けている時点でそれは疑わしいのだが……）。

「――で、誰に会いに行くんだよ」

俺と同じ段位に上がってきたケイが、肩を並べた。

「知り合いのシスターだよ」

「牧師だったら踵^{かかと}を返してた……」

なんて薄情な奴だ。

でも、よくよく考えてみれば、俺は付いてきてくれとは一言も言っていない。多分、俺一人で帰らせたくないからだろうが……。

俺としては助かるのだが、何故そうまでしてくれるのかと聞くのは何となく恥ずかしいのでうやむやにすることにする。

そんなことを考えているといつの間にか目的地に着いていた。

十字架を屋根に掲げた教会の壁には、幻想的なステンドグラスが南を向いている。学園創立から建っている教会の壁が真っ白なのは、教会のシスターや牧師が日替わり交代で磨いているからだ。まるで森を切り開いたような平地に教会が建てられている場所からは、高低差のおかげで学園都市が顔を覗かせていた。

こう見てみると、階段は緩やかだが、けっこうな距離があるみたいだ。

——まあ、魔導科の生徒達からすれば、転移魔法で一瞬の距離だけだな……

教会に来るまで人とあまりすれ違わなかったのは、けっしてシスターや牧師が少ないわけではない。むしろ多いくらいだ。

「あつ、さくやさん！」

——つと、知人の登場だ

声のした方へ振り向くと、腕の中にウサギを抱えた小さなシスターさんが駆け寄ってきた。

教会の白い服装に合わせるように、少女の長い髪は白銀に染まっている。大きな碧色の瞳は、どこぞの生活指導部長とは違い、慈愛に満ち溢れている。

彼女——【シアノ・セリッド・ノンネ】は、今年、イルミネ学園に入学したばかりの一年生だ。

六年制のイルミネ学園では一番下の後輩となるわけだが……、なぜそんな彼女と俺が知り合いかというとシアノはこの教会に拾われた、つまり孤児だからだ。

一年前、逃げ場所を探していた俺が見つけたのがここ、小高い丘に建てられた教会。

シアノは毎回、傷だらけで逃げ込んでくる俺の話し相手になってくれていた。教会に拾われた彼女がこの学園に入るのは自然の流れだった。

「入学おめでとう、シアノちゃん」

俺はそう言っただけで逃げ込んでくる俺の話し相手になってくるとき、こうするのが彼女との暗黙のルールだからだ。

気持ち良さそうに目を細めたシアノちゃんは、俺が手をどけると顔を上げた。

「さくやさんも進学おめでとうございます！」

「え、あ……うん、ありがとう」

キラキラした瞳でシアノちゃんが俺にいう台詞に、隣にいるケイは笑いをこらえるのに必死そうだった。

シアノちゃんに悪気がない分、さらに面白いのだろう——あとで殴っておこう。シアノちゃんに笑顔で返事をする俺は、密かに決意を固めた。

「それじゃまるで俺の進学が危なかったみたいに聞こえるよ」なんて満面の笑みであるシアノちゃんに言えるわけがない。

「また怪我してますね……」

シアノちゃんは俺がよく我をしているところをみている。よく治癒魔法で治してもらったことはまだ記憶に新しい。

平気だよ、と頭を撫でて上げたが、今回は不安の色を消してくれなかった。

「そう言えば、何て言う宗派なんだ？ 宗教には疎くてね」

仲間に加わりたかったのか助け船を出してくれたのかは分からないが、笑いを噛み殺したケイが教会を見上げながら首を傾げた。

「主神コスモスのアルカディアっていう宗派、だよな？」

記憶力にはそれなりの自信があったが、一応シアノちゃんに確認をとる。

「はい。ここに来る人達は、皆主神コスモスの恩恵を授かっています」

胸の前に手を組んだシアノちゃんは目も閉じている。まるで誰かに感謝をしているようだ。シアノちゃんの純粹さは、無宗教の俺にも煌々しく見えた。シアノちゃん周辺の空気が澄み切って見える。ふと、視界の隅に素早く動く白い何かが映った。

「シアノちゃん？」

「ふえ……！？」

俺が声をかけるとシアノちゃんが自分の世界から戻ってきた。純粹なのはいいが、時々トリップしそうになるのが玉に傷だ。きっと主神と交信でもしているのだろう。

「うさぎ、逃げちゃったよ？」

シアノちゃんの腕の中から逃れた、白いもふもふしたうさぎは教会の方に駆けていっていた。

「あつ！ シノちゃん！」

うさぎの名前はシノちゃんと言らしい。

うさぎの逃亡に気付いたシアノちゃんは、あたふたしながらも追いかけていつてしまった。結局、シアノちゃんの背中に軽い挨拶だけで、俺達は教会を後にすることにした。

06

教会から学園に戻ると生徒はほとんどいなくなっていた。

中央広場にあった巨大な掲示板も跡形無く撤収され、いつも通りに戻っていた。

「帰るか？」

「ああ、お姉ちゃんも帰ってくるしな」

俺は左手に付けた腕時計に目を落としながら頷いた。

イルミネ学園の校門は『普通科エリア』と『魔導科エリア』の間に存在している。生徒会室を基準に学園は普通科エリアと魔導科エリアに分かれているのだが、巨大な校門は一つだけしかない。20メートルの城壁に囲まれたイルミネ学園を出入りするには、その巨大な校門を潜らなければいけない――まあ、抜け道はあるようだが……。

校門には駅の改札機のような機械があり、学生証がないと通れない仕組みになっている。

学生証を機械の一部に触れさえすればいいという、シンプルな構造だ。

先行するケイが学生証を用意したの見て、俺も制服の内ポケットから学生証を取り出そうとした時だった。魔導科エリアの方から歩いてきた生徒と目が合った。

「ん……？」

「——っ……！？」

菖蒲色の髪を後ろで纏めた女子生徒に少し驚かれた。

傾きかけた太陽は彼女の顔を赤く染め、手入れされている髪を輝かせている。いつもならアメジストのように輝く鋭い瞳が小刻みに揺れている。イルミネ学園指定の青いチェックのミニスカートからはすらっと伸びる白い足、紺色のネクタイを手前に反り返す二つの膨らみ。相変わらずいいスタイルをしている女子生徒に俺は声をか

けた。

「久しぶりだな、クレハ」

名前を呼ばれた女子生徒——【クレハ・アリスコード】は表情を崩さない。それどころか歯を食い縛り、何か言いたげな——そんな鋭い雰囲気だ。

「……………」

睨み付けられたその瞳は、まるで親の敵を見るよう。

——俺は何かしたのだろうか？

俺は疑問を抱えながら、睨まれる凜とした瞳に数秒付き合っていた。しかし、特に何かあるわけでもなく、クレハは俺に背を向け黙って校門を通り過ぎて行ってしまった。

終始敵視されてた俺は何がなんだか分からず、願わくは、誰かに状況を説明して欲しいくらいだった。

「振られたな……………」

「——！？」

まだ校門を通っていなかったケイが、俺の後ろでぼそと呟いた。後ろを向くと、ケイは意外にもすぐそばにいた。いつの間に近付いてきたのだろう、全く分からなかった。

「まさか、さくやが【氷帝】に…………お前の姉への愛情はそんなものだっ、へぶっ！」

俺が平手で顔を抑えたため、ケイが台詞を最後まで言うことはなかった。少し強く叩いたせいか、ケイは後ろにたたらを踏んだ。

「耳元で叫ぶな。それに俺は凜姉りんねえ一筋だつて」

自分でも不思議だったのは、やけに冷静だったことだ。そのおかげか、鼻をさするケイは「……まあ、そうだな」と素直に納得してくれた。

「……つてか、あの女はアリスコード家だぜ？　なんでお前知り合いないんだよ」

俺はケイが言っていた【氷帝】の方が気になったが、先に答えてやることにした。別に隠すような事では無かったからだ。

「俺が極東地方にいたときな、偶々知り合っただんだよ」

俺が幼い時に極東地方に住んでいたことは、既にケイに話していた。お姉ちゃんの仕事の都合でこちらに引っ越してきたのは、ほんの数年前のことだ。

「幼なじみ……つてことか？」

「さあな、それに相手はアリスコード家の御令嬢だ。そろそろ俺とは縁を切りたいのかもな」

アリスコード家は、有名貴族の中でも名高い家系だ。普通なら俺のような生徒が声をかけるのは躊躇われる——俺もそろそろ社会に順応する頃合いなのかもしれない。

内ポケットから学生証を取り出し校門を通り抜ける。大人しくなったケイも俺に続いて通り抜けた。
学生都市は今日も賑やかだった。いや、新学期ということでもより騒がしいかもしれない。

——まあ、学園祭には劣るがな

まだまだ先の話したが、学園祭はイルミネ学園の年間行事における三つの内、全生徒が参加できる最大の行事だ。去年は散々な目にあつた分今年にける思いは大きい。

——去年は去年、今年はまともな学園生活を送るようにしよう

騒ぐ学生の間をゆつくりと歩きながら、俺とケイは学園都市を通り抜けていった。いつもなら寄り道する食堂も立ち読みしていく書店も今日は無しだ。

今年の学園生活は少しだけ楽しめそうだ。

イルミネ学園に通う生徒の大半は寮に住んでいる。親元を離れたいだとか、朝遅くまで寝ていられると評判も上々な学生寮は、学園

都市の西側に存在する。

しかし、学生寮が重宝される理由は実のところ、金銭面が大きい。イルミネ学園を含む学園都市から外部に出るには、大きく分けて三つの道が存在する。

一つは、主要道路。魔導科学が生んだハイブリットの自動車が日夜激しく行き交う。主に物資等が運ばれてくる。

二つ目は、転移魔法だ。自分で転移魔法を使うのもいいが、学園都市の数カ所には、特定の場所に移動できる『転移ポート』が存在する。長距離転移はある程度の魔力が必要となるため、魔導科の生徒もよく使う。

最後、とは言っても、最もポピュラーな手段は学園都市に繋がるモノレールに乗ることだ。

四方を海に囲まれた学園都市はこうして、外界と繋がりを持つている——もつとも、外界とは言っても限られた区域だが……。

「じゃあな」

「ああ、凜々子さんに宜しくな」

ケイに短い別れと共にモノレールから降りた俺が立っているのは、学園都市から20分にある駅のホームだ。

ここで降りる学生は少ない。それは単純にここ周辺の土地の値段が高いからだ。つまり、金持ちしか住めない地域なのだ。

それは駅を降りれば、誰でもすぐ理解できるだろう。駅前から広がる街は、人で溢れかえっていた。

ビル群は天を貫かんとばかりに建ち並び、自分が谷底にいるようだ。狭く切り取られた空には、小さな飛行機雲が青白のストライプを描いている。

いつもの光景——人が集まるには殺風景過ぎる街——に溜め息を吐いてから、俺は歩き出した。

何を話しているか分からない他人の声がBGMになるだけで、この街の住人は満足のようだ。

俺が住んでいる高級マンションは、駅から徒歩五分のところにある。たどり着くまでには色々な店が立ち並んでいたが、どこも立ち寄る気にはなれなかった。高級と名高いだけあり、マンションのセキユリティは万全だ。

だから、部屋の鍵なんかを無くすと大変面倒なことになる。詩的に言えば、発達した社会の思わぬ落とし穴といったところか。

「……あれ……ここにいった気がするんだけど、うーん……あれ？」

そして、その穴にはまっている女性が一人。俺の住む部屋の前でしゃがみこんでいる。

慌てた様子の彼女は、愛用の鞆の中身をかき混ぜたにもかかわらず、困り果てているみたいだ。

長い黒髪はいつになったら切るのだろう、彼女の身長からして膝辺りまで伸びているはずだ。

彼女は後ろから忍び寄る俺に全く気付かず、「どうしよう……」とか細かい声で沈みきっている。

これで魔導ランクA、イルミネ学園首席卒業と言うのだから、多少疑いたくなるのも無理もない。後ろに立つと、しゃがんで縮こまっている彼女が一層可愛く見える。

——抱き締めてもいいだろうか？

普段は滅多に見れない彼女の姿に、そんな欲望がふつふつと沸き上がってくるのに対し、暁さくやの理性軍は苦戦を強いられている。

時間が経つに連れ、寝返るやつらも出てきていた。

「凜姉」

「ひゃっ!」

声をかけると、年齢に反して小さい体がピクリと跳ね上がった。

——可愛い……

声をかけたのが俺だと気付いたからだろう。最愛の姉である【あかつき暁凜々子りりこ】は、しゃがんだままこちらに向き、俺を見上げた。

黒曜石のように純粋な瞳が俺を射貫く、目尻はキラリと光る小さな水滴が浮かんでいる。瞳や前髪の漆黒を際立たせているのは、彼女の顔が精巧に作られた人形のように整っているからでもある。

「まったく、また鍵なくしたの?」

「う……」

凜姉は気まずそうに目を反らした。目尻に溜まった涙が零れそう
だ。

彼女が鍵を無くすのはいつものことだ。研究所から家に帰ってくる時は、八割方忘れてくる。

「ふう……凜姉」

「……うう……」

俺が声をかけると、うめき声ともとれる消えてしまいそうな返事が返ってきた。しゃがんだままの凜姉がゆっくりとこちらを見上げ直す。

俺の口から出る言葉を待っているように、凜姉の大きな瞳は揺れていた。

「おかえり」

そう言ってしゃがみこむ姉に、右手を差し出した。

「……………」

少しだけ躊躇った後、凜姉は黙って俺の手を受け取った。乗せられた小さな手は、思っていたよりも冷えていた。

「——ただいま……………」

凜姉はそっぽを向いたまま呟いた。

凜姉の照れる姿は珍しい——俺はすかさず脳内フォルダーに保存した。

第二話

01

——ん……朝か……？

普段から起きる時間を決めているからだろ。目覚ましが鳴る前に、俺の意識は覚醒しつつあった。

薄暗くぼやける視界には、ジャージのズボンが——何も不思議なことではない、俺は寝間着の代わりにジャージを愛用しているのだ。はいているのは、黒い生地には赤いラインが入った個人的にも気に入っている一着だ。

そうは言っても寝起きにジャージを鑑賞する趣味はない——眠気も和らいできた。

“座っている”俺は、両足に力をいれた。

「んっ、ん……ん？」

——立てない……

立てないどころか、座っている椅子の後ろに両腕をまわされ、ガツチリと拘束されていた。無事なのは唯一首から上だけ、よく見ればジャージは下半身だけで上は何も着ていなかった。ただし、首にかけた胸元のチョーカーは服には数えない。

——え……なにこの状況、誰か説明しに来てくれ……！？

首を左右に振り、助けを求めたが誰もいない。

分かったのはここが俺の部屋で、薄暗いのは照明が常夜灯だったからというだけだ。着ていた上着は壁際のベッドの上に畳まれており、やはり俺が自分で脱いだわけではなさそうだった。

拘束を破ろうと腕にもう一度力を込める——がまったくもって外れる気配がなく、腕に細い紐ひものようなものが食い込むだけだった。

——！？

音に敏感になっていた俺は、誰かが廊下を伝い、この部屋に近付いていることを察知した。

徐々にはつきりとして行く足音、相手は俺を拘束した人物で間違いないだろう。

ひたひたと歩いていた彼女は、この部屋の——つまり、俺が目の前にしている扉の向こう側で足を止めた。ノブが回り、ゆっくりと扉が手前に開く。

「あら……起きちゃった？」

台詞に重ねられ、部屋が光で満たされた。

黒いワンピースを着た彼女——凛姉は、さも残念そうに微笑んだ。その艶美な表情は、部屋に入れずにいた昨日の彼女からは想像できない。

シャワーを浴びてきたのだろう、熱気に包まれほんのり頬が桜色に、長い黒髪は白いリボンで結ばれていた（彼女が自慢の髪をリボンで結ぶ時は、湯上がりの時だけ）。

丈が短いワンピースから覗く無防備な太ももに、思わず視線を奪われる。

「……どこ見てるの？」

俺の視線に気付いた凜姉がわざとらしく尋ねた。発せられることはの一つ一つから甘い香りがする——全部わざとだ。

「——っ……」

目を反らしたが、床に浮かぶ彼女の残像は消えてくれなかった。無理やり消そうと目を閉じたが、むしろ悪化した。凜姉の華奢な鎖骨や凜とした瞳、柔らかそうな唇が絶えることなく脳裏に浮上してくる。

自主規制出来ない妄想から俺を引き上げたのは、部屋のドアが閉じられる少し強めの音だった。

「——っ……な、なんで俺は縛られてるんでしょうか？」

再び密室になった自室は、さっきより狭く感じた。頬をひきつらせながら、俺を拘束したのであるう本人に理由^{わけ}を聞く。凜姉の笑みが、深みを増した——間違いない、犯人はこの人だ。

「ふふっ……昨日は私だけ泣いちゃったでしょう？ お姉ちゃん、それじゃ不公平だと思うの」

満面の笑みでそう言う彼女の背中からは、黒い羽が生えてきそう
だ。

——理不尽だっ！

とりあえず心の中で叫んでおいた。そうでもしないと本当に叫んでしまいそうだったからだ。

上がる心拍数を気にながら、思考を水平に戻す。ところが、暫くして落ち着く次に襲ってきたのは後悔と反省だった。

——すっかり忘れてた……

凜姉は意外に負けず嫌いだってこと。そして、俺がM体質になったのは彼女のおかげだってことも。

冷や汗を垂らす俺を見下しながら、楽しそうに近付いてくる凜姉に何か期待をしてしまうのは、俺が異常だからなのだろうか。動けない俺の手前で止まった凜姉は、その視線を頭から少しずつ下に降ろしていった。冷ややかながらも刺激に溢れた視線に曝^{さら}された部位に電気が走る。

「ふふっ、朝から元気ね」

「け、健全な男子学生ですから……」

苦しい、相変わらず苦しい言い訳だ。朝だからと言うべきだったのだが、心臓の高鳴りがうるさくてそれどころではなかった。

どこが元気なのは察して欲しい。

「お仕置きが必要ね……」

狭い自室に凜姉の呟きが響いた。

フライパンの上の目玉焼きに水を加えると、白い水滴が宙にのぼった。全部蒸発してしまつたら意味がない——すぐに蓋をする。

目玉焼きが完成するまでの数分を使い、キャベツを千切りに水菜と一緒に小皿に添える。

フライパンの火を止め蓋を持ち上げると、半熟の目玉焼きがベークンを下敷きにして焼き上がっていた。

トースターで焼きあがっている食パンを別皿に取り、ダイニングテーブルに並べる。

「……洋食？」

テーブルにっていた凜姉が語尾を上げて尋ねてきた。

「お姉ちゃん、朝は和食なんだけどなあ……」

用意した朝食は一人分。俺は凜姉の食事を作り終えると、まくつていたワイシャツの袖を元に戻した。

「ごめん、でも今日はもう時間がないから……」

凜姉が朝食に和食を選択するのは、珍しいことじゃない——極東育ちの俺にとっても。極東では和食が当たり前だったからだ。

ワイシャツの袖を元に戻した俺は、テーブルの上に置いてあった腕時計をはめながら時刻を確認。余裕は無かった。

「食器は水に浸けといて、それから誰か来てもたその姿で出ないよ
うにね」

学園指定の軍服のような黒いブレザーに袖を通しながら、凜姉に念を押しておく。

「……さくや、私を誰だと思ってるの？」

そう言っただけ鋭く光る瞳も、トーストをかじりながらだともったく
迫力がない——いや、むしろ可愛くなっている。

「分かってる、でも凜姉は凜姉だよ。行ってくるね」

モノレールが到着する時刻まで時間があるわけじゃなかった。青
いカバンを肩にかけ、俺は凜姉に背を向ける。

「待ちなさい」

呼び止められた声に振り向くと、凜姉が椅子の上に立っていた。
目線が俺より少しだけ高い位置をとっている。

手招きされるままに近付くと、ネクタイを強く掴まれた。引きず
られた胸が自然と前に反れる。

「曲がってるわよ」

「あ、ありがとう」

少しだけきつくネクタイを締め上げた凜姉は満足そうだ。

「よし」

「じゃあ、行ってくるね」

部屋を出る時に、背中からかけられた「いつてらっしゃい」の声に思わず頬が緩んだのは内緒だ。

少しだけ世界の純度が増した気がした。

03

鉄のドアが閉まると同時に飛び込んだせいだろう、車内からの視線が痛い。

「ギリギリだな」

「計画、通りだ……」

息を整える前にケイに返事を返したからだろう、言葉がなかなか続かなかった。

俺がこんな仕打ちを受けてまで、この時間帯のモノレールに乗るのは理由がある。

乗って来る生徒が少ないということもあるが、一番には、この時間に発車する車体が学園の登校時間ギリギリに駅に着くからだ。

俺の場合、早い時間帯に学園に着くと面倒事が多い——それを避ける手段の一つだ。

「——そう言えば、今日の夜、空いてるか？」

呼吸が整い、つり革を漸く握れるようになった俺にケイが話しかけてきた。

「何かあるのか？」

「……いや、ちょっと面白い事があってな」

質問を質問で返されたケイは、車内の上方に貼られている求人広告に視線を反らした。

「まあ、凜姉の夕飯を作った後なら……」

平然を装うケイに警戒心を解いていた俺は、無用心にも呟いてしまった。

「そうか！　なら、19時25分発のこの路線に集合だ」

態度を180度変えたケイが赤い瞳を輝かせた——まるで新しいオモチャを見つけた達^{たち}の悪い子供のように……。

——嫌な予感しかない

こういう時は大抵、何かのトラブルが起きる前兆に違いない。違

いないのだが、ケイのやろうとしていることに興味が無いわけではなかった。

凜姉と一緒に居たいのは山々だが、彼女が帰ってきた数日間パソコンと向き合っていることを知っている。ならばケイの誘いに乗っても悪くはないか——そう思った。

——それにしても夜に……繁華街にでも出るつもりなのだろうか
車窓から学園の城壁が見えた——理由を知るのはもう少し先になりそうだ。

04

4月の初期は授業が少ない。（初期と言っても、一週間ほどのことを言うのだが……。）

のんびりしていると思われるが、計8000人ほどいるイルミネ学園は、運営を開始するのも大変なのだそうだ。

それに忙しいのは先生達だけではない。学園都市を運営しているのは、三年生以上の普通科の生徒だ。二年生の俺達は暇に見えるが、来年からはそうは言ってられない。

「さくや、お前何かやる？」

かけられた声に振り向くと、かけた本人は体を“く”の字に曲げ、右手を枕がわりにこちらを見ていた——つまり、ケイのやる気の無さは全開だった。

——人に聞いておきながら、どうせ自分はやらないつもりだろうな……

遅刻を回避するため全力疾走して登校してきたとはいえ、それはいつものことだし。一限目から明らかに怠そうにしているのはどうかと思う。

そんなことを思いつつも、前に書かれた内容にもう一度目を通した。真つ白だった電子掲示板には、幾つかの項目が横書きに書かれていた。それをバツクに話を進行しているのは去年、学級委員であった女子生徒だ——彼女はまた今年も勤めるに違いない。

「どれも大したことは無さそうだけど……残ったのをやるよりはいいんじゃないか？」

ぱつと見た素直な感想を言っただけで聞かせた。やはりこういう時は自分から動くべきだと思ったからだ。

何事にも言えるのは、先手を打つに越したことはないからだ。

「委員会とか面倒なだけだって、俺にはもっと大切な事があるの」

ケイはそう言っただけで俺の意見を一蹴、溜め息をついた。

そう、一限目から決めているのは委員会というやつだ。生徒が主導として運営する組織のことを委員会いう。

主としては、学園祭実行委員、学級委員、図書委員、保健委員、学園都市治安委員……等々。

「まあ、いいか……」

よくよく考えれば、このクラスには150人もいるのだ。きっと誰かがやってくれるだろう——俺が進んでやることは無意味な気がしてきた。

去年は自身の事で手一杯だったのだ。眺めるどの委員会にも思い入れはなかった。

——それに俺はやらない方がいい、かな……

左に視線を移すと、窓越しに生徒会室が目に入った。静かにそうに見えるあそこも、部屋の中にいる生徒会役員は騒がしいだろう。

快晴から射し込む穏やかな斜光は、程よく気持ちがいい。

重たくなってきたまぶたに身を任せると、意識が朦朧としてきた。生徒会室の上部に突き出たテラスからこちらに手を振っている人物がいた気がしたが、はつきりと見えなかった——眠気が優に勝っていたのだ。

教室が次第に騒がしくなるのを耳で感じながら、俺は夢の中に沈んでいった。

結局、その後、俺が目を覚めたのは太陽が真上に昇った、ちょうどその時間だった。

約四時間、俺は熟睡してしまっていたようだ——隣の友人は未だ爆睡しているが……。

「……おい、起きろよ」

さっきまで寝ていたやつのだいじょうぶとは思えないが、そこは気にするところではない——授業は明日からなのだ。

声をかけながら、目を覚まさないケイの肩を掴んで暫く揺らしている、やっと反応があった。

「ふふふ、いいよ……」

目を閉じたまま幸せそうに笑うケイが呟いた。

「……」

俺はそつと、手を離した。

なんだか知らないが邪魔しちや悪そうだったから、というのは建前で、本音はにやけるケイが不気味、いや気持ち悪すぎたからだ。

にやけたまま起きそうにない友人に溜め息をつきながら、自分の鞆から緑色の布にくるまれた弁当を取り出した。

幾つかのグループになりつつある教室を、俺は一人、静かに去ることにした。

「——というわけであの馬鹿は置いてきたんだ」

去年から昼飯を食べる場所は決まっていた。

隠れているわけではなかったが、教室、中庭、中央広場、部室…

…という主だった場所は、人が多くて居づらかったのだ。

想像してみてもいい。周りが楽しそうに食べているなか、一人で昼食をとっている俺の姿を。それは俺にとっても、周りにとってもマイナスの空気しか漂わせない。見えない針が突き刺さる感触を味わうのは、誰にでも苦手なものだ。

そんな中、昼の教会は人が少なく、時間を潰す俺にとって好都合な場所だった。

「珍しいですね、さくやさんが教室で寝るなんて」

俺の隣でサンドイッチを両手に持つ少女、シアノちゃんが笑う。

小さな口でサンドイッチをかじる少女は、まるで小動物だ。ほおつておけば頭から耳が生えるかもしれない。

南に面した教会前の階段は日当たりがよく、この時期はここでよく二人で食べるのだ。

俺の怪我を治してくれるという名目で来てくれていたが、今では昼食を一緒にとってくれる小さな友人だ。

初めて俺の弁当を見せた時のことは今でもよく覚えている。俺の弁当を見てシアノちゃんがまず驚いたのは“箸”だった。極東では当たり前だったが、弁当に箸をつけてくるのは俺くらいなものらしい。物珍しそうに眺めるシアノちゃんの眼は、学園に来てから初めて感じる類いのものだった。初めこそ会話が少なかった俺達だったが、今では冗談も言える仲だ。

たわいのない会話をしながら、食事も終盤に入った頃、タイミングを見計らい俺は話題の向きを変更した。

「……あのさ」

「はい、何ですか？」

制服姿のシアノちゃんは学園指定のミニスカートの上で、ランチボックスを片付け始めていた。

「シアノちゃんは、教室で食べた方がいいんじゃないかな」

「え……？」

俺の突然の提案に、どうしてですか、と続けるのが目に見えた。下手な事を言ってしまえば崩れてしまいそうな、そんな表情をシアノちゃんは浮かべている。

それでもやはり言うべきなのだろう。言う方が彼女の為になるのは明らかだ。

「友達とかさ、いた方が楽しいよ。それに学園の生徒になったんだから、俺とはあまり関わらない方がいい」

全て本音だった。

シアノちゃんとの食事は楽しいし、俺からすればこれからもそうしてくれるのはありがたい。

でも、学年の違うシアノちゃんにこれから必要なのは俺じゃなく、間違いなく同学年の友人だ。孤独は辛いし、シアノちゃんにはそうなっただけじゃなかった。

「あ、別に俺がシアノちゃんを嫌ってるわけじゃないよ。たださ、先輩からのアドバイスってことだよ」

シアノちゃんが口を開いたのは、俺が一通り話し終えてからだっ
た。

「えっと……友達が大切ということですか？」

「まあ、選ぶ必要はあるがな」

俺が苦笑いすると、シアノちゃんの表情も柔らかくなってきた。
きつとシアノちゃんもケイを思い浮かべたのだろう。

「六年間は長いよ。良い友達がいるに越したことはない」

食べ終えた弁当を片付け、それを持って立ち上がる。体が妙に軽
かった。

「それなら、教会のお手伝いがある日は一緒にたべませんか？」

シアノちゃんは俺の制服の端を掴んでいた。

「シアノちゃんがいいなら」

俺が言いたかったのは、友人が大切だと言うことだけだ、誰にと
っても。拒絶する理由はどこにもなかった。

「じゃあ、そうしますね！」

笑顔に戻ったシアノちゃんが俺の制服を離すと、勢いよく立ち上
がった。

元気が戻ったのはよかったが、問題は別なところで起こった。

膝にランチボックスをのせていたのを忘れていたのだろう。彼女がそれに反応する前に、ランチボックスは落下を始めていた。突然のことだったので、俺が反応するかは一時的な判断に委ねられた。

「——つと」

左手で自分の弁当箱を持ったまま、俺は膝を曲げて彼女のランチボックスを受け止めていた。地上スレスレ、我ながら大した瞬発力だ。

「あ……す、すみません！」

「大丈夫、気にしないで」そう言おうとして、立ち上がったその時だった。

誰かが言っていた、ハプニングってのはまとめて訪れるって。

「へ……？」

「あ……」

立ち上がる途中で、ランチボックスがシアノちゃんのミニスカートに引っ掛かってしまった。

スカートは無抵抗なまでに裏を返し、俺がもつランチボックスが元に戻るのを妨げている。彼女の白い下着が頭あいつになっているのは言うまでもないだろう。シアノちゃんは何が起きたか理解出来ないように、固まったままだ。学園指定のミニスカートはたまに下着が見えるとクラスの誰かが話していたが、これでは端はたから見れば、俺が故意に捲めくっているようにしかみえない。

「——っ、きゃっ!」

現状を理解できたシアノちゃんが、捲り上がったスカートを両手で抑える。

「う、ごめんっ!」

何とか取り繕うと謝ったものの、頬を紅潮させているシアノちゃんは下を向いたままだ。やってしまったなんとも言えない空気がまとわりつく。

「シアノ……ちゃん?」

かといってここで沈黙が続くのは最悪なパターンの一つだ——それは回避しなかった。

「——っ!」

心配して名前を呼ぶと肩を少し跳ねたが、すぐに顔を上げてくれた。

「平気です! し、失礼します!」

シアノちゃんは俺が持っていたランチボックスを（なかば引つたくるように）受けとると、魔導科の中央広場に続く階段を、一人駆け降りて行ってしまった。

ケイが教会前に来たのは、それから暫くしてからだった。

午後のLHRはあまり記憶に残っていなかった。大人しく聞いていれば、モモちゃんは何も言っていなかった（当たり前だが）。

——まあ、大人しく聞いているからと言って彼女が話す内容を聞き取ったかと言われれば、微妙なラインだが……

明日から授業だということ、それに準じる諸連絡が辛うじて頭の片隅に残っていただけだった。

「——で、今日はどこに行くんだよ……」

直帰しようとしていたのに引き留められた俺は、テンション三割カットで隣の友人に話しかけた。

視線だけ動かして、周りを見回す。放課後の教室はもうあと数人ほどの生徒しか見あたらなかった。

「それは秘密だ」

笑顔で行き先を隠すケイは、誰が見ても怪しさ満点だ。溜め息をつき、この疑念に拍車を駆けている元凶に目を移す。

学園指定の青い鞆が持ち主の机の上を占拠している。

登校時には見かけなかった、破裂しそうなケイの鞆が気になってしかたがない。

「……『郊外』、じゃないよな？」

態度を一変し、少しだけ真剣な口調で問う——それだけは洒落しゃれにならないからだ。

一般人にこれを聞くなら、確率など計算する間もなく返答を予想できる。しかし、今俺の目の前にいるのはケイ・インターナルであり、その確率はコインの裏表と等しいと言っても過言ではない。この友人には、保険をかけすぎるくらいがちょうど良い。

「ああ、それは約束する」

先程と変わらない笑顔でケイは答えてきた。口調に迷いや乱れは無い。ため嘘ではないのだろう。

「分かった。約束した時間に駅に行くよ」

「よしっ！」

返答を聞くと、ケイは小さくガッツポーズをしながら席を立った。

——やはり断るべきだったかもしれない……

返答を改めようとしたが、相手はすでに教室の出口に。わざわざ引き留めたにも関わらず「早く来いよ！」と、手招きする友人に、殺気が湧いた瞬間でもあった。

夕食を終えると、ワンピース姿の凜姉は自室に戻っていった——
シャワーでも浴びたのだろう、朝着ていたものとは柄が違った。
帰宅して数日間の彼女の行動パターンが、この繰り返しになると
いうのは、家族である俺はよく知っていた。研究のデータや理論を
タイピングしているようだが、内容については知るよしもない。国
立研究所の研究内容となると、家族にも気を使うものかもしれない
——もつとも自分から聞いたことなどないのだが……。

「七時……か」

ダイニングルームの壁にかかる時計を体を、捻ってキッチンから
覗いた。帰宅してシャワーを浴びた後、すぐ夕食の支度に取りかか
ったおかげで、約束の時間には間に合いそうだ。

洗っていた最後の食器を乾燥機に収める。仕事を交代しつつ、濡
れた手をシステムキッチンの取っ手にかけられたタオルで拭く。水
気を拭き取り終わると、捲っていた袖を元に戻した。

俺が着ているのは制服だ——学園の帰り道、不意にケイに付け加
えられたのだ。カラオケにでも行くのだろうか——制服姿と言えば
学割くらいしか思い付かない。

「凜姉、少し出てくるね」

少し大きな声で、リビングから凜姉に呼び掛ける。返事はないが、
聞こえてはいるのだろう——いつもこれで大丈夫だからだ。

腕時計を忘れた事に気付いたのは、部屋を出てエレベーターに乗ってからだった。時間が分からなくなるのは痛い、今更戻る気も起きない——結局、そのまま駅に向かうことにした。

マンションの出入口である自動扉が開いて間もなく、突き刺すようなつむじ風が俺の頬をさらった。制服の上着を着てきたことが、功を奏したようだ。春とはいえ、まだ寒気の名残があり、街の横断者は、通り過ぎる風に誰もが肩をすくめていた。俺は雑踏に紛れながら、似合わない高級住宅街を通り抜け、駅へと足を運んだ。

改札機を通った後の駅内には、プラットホームで次の車体待つ人影さえ見当たらなかった——吹き抜ける風が余計に冷たく感じる。安全性が考慮されたホームの乗車口に当たる場所には、子供や泥酔者が線路に立ち入らないように、ガラス張りの扉が装備されている。鏡のように磨かれた表面に映る自分と睨み合っていると、アナウンスが流れた。

暫く経って、モノレールが静かに着駅した。降りる人もいなかった。ので、扉が開くと同時に踏み出した。

「上々だな」

「知っているだろ？ 約束は守る方なんだ」

気が抜けるような排気音を背中にして、鞆を肩にかけた友人と声を交わした。

素直な感想から言って、赤い髪はワイシャツには似合わない。ケイは制服の上着を着てきていなかった。いつものだらしなく緩んだネクタイさえ外されている。

「ずいぶん動きやすそうな格好だな」

揺れるモノレールの閉じた扉に体重を預けながら聞く。ケイは今

気付いたと言うように、自分の格好を見渡してから口を開いた。

「ああ……、ちょっと走ってきたからな」

語尾を上げながら言われても困る。それに、まったくもって答えになっていない。言及すれば何か面白いことでも言うかもしれないが、俺に関係があるとは思えないので止めにした。

それに、今聞きたい事は別にあったからだ。

「……そろそろいいんじゃないか？」

さりげなく同室に誰もいないのを確認しながら聞いた。

「何が？」

赤い前髪が小さく揺れている——分かっていながら、聞き返すのはこいつの性格からだ。

「……行き先だよ、行き先」

あからさまな溜め息について質問を詳細化する。

無論、ケイが人徳者であればこんな気苦労はしなくてすむのだが……。

腕を組んでいるワイシャツ姿のケイは、少し間をおいて——観念した。

「学園だ」

「……は？」

思考がぶっ飛び過ぎてついていけない。

俺は口を半開きにして、ケイの表情をうかがった。依然として真剣な瞳は、好奇心と期待感で稚拙に輝いている。

「何でまた……」

学園に行くのは本当なのだろうが、理由が見あたらなかった。

試験が近いわけでもないのに、解答用紙を盗みに行くわけでもない。この話は朝から持ち掛けられたのだから、忘れ物の可能性はゼロだ。学園都市が光を落とすまでには時間がありそうだが、そこに寄ると思えない（帰りに寄ればいいからだ）。

「まあ、それはお楽しみということだ」

ケイは、タイミングよくスピードを落とす車内で、二ヒルに頬を釣り上げた。

08

「ぐおおお……寒い」

「だろうな……」

ぼんやりと光が灯る学園都市を抜けた俺達がいるのは、学園の“外”側である。満月に照らされた学園の城壁は、越えられそうに無いほど高い。ラダーや梯子はしがあっても、俺は断るだろう。

視線を水平に戻すと、馬鹿が1名凍死しかけていた。

「風邪ひくかも……」

「それなら一種のパラドックスだな」

馬鹿は風邪をひかないというが、風邪をひく馬鹿はいるということだろうか——自分で言っていて、よく分からない。

ケイは自分の肩を抱き締めながら、首をかしげた。

「学園には、入らないのか？」

かれこれ三十分程、先行するケイの体温は極めて低そうだった。

「入るよ、入る……」とこころ辺だな。さくや、上着貸して」

城壁を感触するケイが手を伸ばしてきた。自分の上着使えよ、と言いかけてケイの服装を思い出した。

渋々、制服のブレザーを脱いでケイに渡すと、寒気が肌を撫でた。アンダーシャツを着ているおかげで、特別寒いわけではないがそれでも早く上着を返して欲しくらいだった。

「ちょっと下がってる……」

持っていた鞆を地面に下ろし、俺の上着を羽織ったケイが、後退するよう俺を左手で押し退けた。

俺が一、二歩下がったのを見て、ケイは一人壁と対面した。自分

の両手を壁に押し当て、大きく息を吸う。
そして、それは一気に吐き出された。

「契約に反し、名を偽る仮初めの——」

ケイが始めたその言葉は、誰が聞いても『詠唱』だ。

『詠唱』は、簡単に言って、魔法を扱う時に必要な合言葉のようなものだ。『組織化された魔法』、つまり『魔導』を発動させるものとして一般には定着している。

ケイが詠唱を続けると、壁に幾何学的模様が浮かび始めた——正確には、赤く光り始めたと言うのが正しいのだろう。

魔法を施行する時に生じるこの幾何学的模様が『魔方阵』と言う。一般的に『魔方阵』は円を下地に描かれることが多い、今回もそうだった。

ケイは『普通科』の生徒だが、魔力は平均並みに持っている。魔法が施行できてもおかしくはなかった。

「ふう……よし」

ケイが詠唱を終えると、浮かんでいた魔方阵が薄れていった。

——結局、何をしていたのだろうか？

ケイ自身は手応えを感じていたようだが、部外者の俺には分からない。

「じゃ、入るか」

「え……？」

ケイはそう呟くと、地面に置いた自分の鞆を拾い上げ、おもむろに壁に向かって進みだした。

次の瞬間、ケイが壁にのめり込み、そして吸収されるように姿を消した。

「……マジ？」

疑いつつ、壁に手を突き刺した——抵抗は感じられない。予想していたゾル状の生温さもなく、壁はただの水ログラムと化していた。壁を難なく通り抜けた俺を待っていたのは、自慢げに、にやけるケイだった。

驚いたのは、壁を透過出来たことではなく。強固なはずの学園のセキユリティーを掻い潜ったことであつた。

「なんだよ、頼けた顔して——」

小さく笑うケイの怪しさは、金色に光る満月を背中に一層増していた。

そして、こう続けやがった。

「——お楽しみはこれからだぜ？」

ケイの台詞に合わせたように、教会のベルが遠くで鳴り響いた。空気が騒然とし、揺れる草木が警戒を促し始めた。真冬に浴びる静電気のように、体の全神経が異変を知らせていた。

「おいおい……冗談だろ？」

真っ赤に染まった満月を見上げながら、思わず感情がこぼれた。

――夜が始まる……――

誰かが、そう呟いた。

――log-out……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7130y/>

Knight in night ~それでも世界を愛すのか?~

2011年12月14日07時51分発行